

「新約のきよめ」

第1章 過誤がないことではなく、
責められるところがないこと

はじめにー到達点を明白に

スポルジョンが「普通のクリスチャンが世の人よりも高いように、普通のクリスチャンよりも、はるかに高い恵みの一点がある」と書いている「きよめ」の経験

より高い生涯、全き聖化、キリスト者の完全、全き愛、信仰の安息、などの用語で表されているが、多くのクリスチャンによって認められ告白されている同じ経験。

「きよめ」という語は

- ・一般的にはクリスチャン生活と品性すべてに当てはめられる。
- ・しかしもっと限定された意味においては、義認と区別される経験を表す語。
「ふさわしくないすべての罪の要素を除去し、新生によって植えつけられた聖の要素に敵対するすべてのものをたましいから除去する経験」

それが何であるか、何でないかを明白にすることは、的確に求めることができるためにとっても重要。

過誤がないことではなく、 責められるところがないこと

私たちがこの世にあって到達できる最高で最大限の点には限度があるということは、きよめを求めるすべての人が感じている。まずそのことを明らかにしていく。

まず第一のポイントは、
「過誤がないことではなく、責められるところがないことである」
ということ。

恵みは、人を過誤のないものにはしない。過誤を犯す傾向性は一生つきまとう。それは傷が治ってもなお残る罪の傷跡。

私たちは、現世においては、責められるところがないように保たれる(テサロニケ I 5:23)以上のことを望むことはできない。

それゆえ私たちに当てはめられるのは 第二のアダムの律法

墮落以前の間人(アダム)に当てはめられたのは、完全な服従の律法。

アダムは人間として完全だったので、過誤のない生活が要求された。

しかし罪は、弱さから決して解放されないほどに、道徳的・霊的な力をゆがめている。

知識の欠如、記憶の衰え、判断の誤り、理解の遅鈍、などなど…

だから、完全な正確さからの逸脱を許さない全き律法を守ることは不可能。

それゆえ私たちが置かれているのは、第二のアダム(天から来られた主)の律法の下。

そこで求められているのは、愛の完全、動機と意図の完全。

神は結果をご覧になるより、意図をご覧になる。

人は私たちがすることを見るが、神はなぜ私たちがそれをするかを見られる。

「わたしの前を歩み」なさいという神のご命令は、私たちにとってまことにあわれみ深い。